女子教育源流考

―鹿児島県を事例として―

二見剛史

はじめに

悠久な日本の歴史から推察すれば、男女平等の価値観に立ち、新しい女性像の形成を目指して歩んでいる時代は、まだ夜明けの段階であると言えるかも知れない。なぜなら、つい最近まで、女性は「出ること・知ること・伸びること」を抑圧され、忍従と犠牲を美徳と教えこませた男尊女卑の社会が厳然として存在していたからである。

第二次大戦後、教育の機会均等により、女子学生が急増し、全国各地に女子大学が誕生した。因みに、戦前の中等段階以上の教育機関では男女別学の原則が貫かれていた。高等女学校という名称そのものが、良妻賢母主義と相俟って女子教育の目的と内容の限界を示している。大学や高等学校は女子と無関係な存在だったといえる。「女と百姓に学問は不要」とする封建時代の考え方が根強く遺されていたとも解釈できよう。

こうした巨視的観点に立って昨今の女子教育を検討しようとする時、明治以後の諸事実は現状を把握し未来を展望するための研究素材という感じがする。戦後四十年の歩みも亦ある意味では女子教育の理念を明確にするための反省材料になり得るのではないだろうか。

偶々本年は実践学園の創設者満田ユイの生誕百年にあたる。[1]「古い歴史の学園に生まれた新しい大学」として創設された鹿児島女子大学の背景にある教育史的事象――たとえば満田ユイの教育観、鹿児島県中等教育史の概観、女子教育をめぐる全国的動向等々――それらを逐一繙きながら、女子教育史研究の方法論を模索してみたいというのが本研究のねらいである。

一　明治期鹿児島の女子教育

「邑に不学の戸なく、家に不学の人ならしめん」ことを期して、男女の別なく、八年制の尋常小学を「必ス卒業スヘキモノトス」と定めたのが明治五年の「学制」であった。その際、「小学校教員ハ男女ノ差別ナシ、其才ニヨリ之ヲ用フヘシ」との方針により教員養成における男女共通教育[2]の構想も打ち出されている。

明治期鹿児島の教育は、この国家的方針を受けて、管内に六中学区(第五大学区内一九～二四)、一、二五〇小学区を置くことゝなり、[3]教員養成についても、明時館跡に小学正則講習所、天文館跡に小学正則女子講習所をそれぞれ明治八年に設立した。[4]翌年、前者を鹿児島師範学校、後者を同女子師範学校と改称している。[5]こうして、鹿児島県における女子中等教育機関が誕生したのである。以下、少しく女子師範教育の変遷を見ておく。

西南の役で一時閉校となった鹿児島女子師範学校は、明治十一年十月、鹿児島師範学校内に仮設されて女子生徒三〇名を募集し、年齢十四歳以上三十五歳以下の者で、「近易(ママ)の書を読み、加減乗除の算術を能くするもの」[6]を入学資格とした。程なく、山下町に校舎を新築し、明治十二年一月移転する。同年十一月、新たに規則を制定するが、翌十三年十一月には鹿児島師範学校と合併、同校の女子教場と改称された。生徒定員は一〇〇名（明治十七年九月の教則）である。女子教場の校地は二、五六六平方米（七七六坪二合）とされている。三コースに分かれ修業年限

は初等師範学科が一年、中等二年半、高等四年となっていた。因みに、『文部省年報』の「明治十七年官立府県立町村立高等女学校一覧表」によれば、鹿児島師範学校高等女学科（五年）があり、[7] 教員数一〇（男六・女四）、生徒数八一、日々出席生徒平均数四二、卒業生徒数七と記録されている。このレベルの学校は全国で僅か九校にすぎない。創立は明治十年となっている。

女子教場は明治二十年三月、鹿児島県尋常師範学校女子部と改称、修業年限四か年とされ、下って明治三十一年四月には鹿児島県師範学校女子部となった。さらに明治四十二年、鹿児島県議会は男女師範学校の分立を議決、翌四十三年四月、鹿児島県女子師範学校として独立、鹿児島県立第二高等女学校を併置した。すでに同第一高等女学校が明治三十五年五月に創設されていたわけだが、如上の経緯によって明らかなように、女子師範学校は鹿児島県女子教育の源流として位置づけられるのである。

明治前期の教育には地域により格差のあることがよく指摘される。師範教育ではそれほどの遅れを示していない鹿児島だが、明治二十年の全国調査によれば、[8]「自分の姓名を書けない者」の割合は、滋賀県の男一二・八％、女四六・五％（最高位）に比べ、鹿児島県は男六一・五％、女九四・一％と最下位にランクされている。明治十年代の鹿児島県教育界の動きについては史料にもとづいた本格的研究が待たれる所であるが、史料収集不備のため割愛せざるを得ない。

「城山一敗始めて関門を開て、世間を眺め、顧て深く世の進歩に後れ居たるを発見したり、爾来、鋭意学事を勧め、……云々」[9]とは、本富安四郎『薩摩見聞記』の一節であるが、文盲率女子九四・一％という明治二十年前後の鹿児島はまさに「世の進歩に後れ居たる」地域であった。心ある人々はその実態を憂い、打解策を考える。一連の私立学校が簇生するのもその表われであろう。史料不足のため、こゝではその名称を列挙するにとどめざるを得な

い。詳細は今後の研究に委ねる。

○廣明学舎[10]〔鹿児島阪元村・明治十一年設立〕

――教員数　四（古賀政二郎ほか）・生徒数　男九三・女五（明治十一年現在）

○研明舎[11]〔鹿児島中村・明治十二年設立〕

――教員数　四（山田海三ほか）・生徒数　男一〇一・女二一（明治十三年現在）

△妥蘋女学校　明治二十二年設立

△鹿児島高等簿記学校　明治二十二年設立

△成淑女学校　明治二十三年設立

△鹿児島女学校　明治二十四年設立

△山口女学校　明治二十五年設立

△鶴嶺女学校　明治二十九年設立

▽有終女学校　明治三十五年設立

▽明治女学校　明治三十六年設立

▽錦江女学校　明治三十六年設立

▽千台女学校　明治三十六年設立

この他にも多くの私立学校が誕生しており、[12]中には女子の入学を許可した学校のあることも予想されるが、明確は期し難い。このうち鶴嶺女学校[13]については後述する。

次に注目すべき学校は鹿児島女子実業補修学校である。[14]明治二十七年（一八九四）十月一日鹿児島市易居町に同

市第三区費をもって創設された。学科構成は本科・撰科（裁縫科・造裁科・刺裁科）・別科から成っている。明治二十九年四月、鹿児島女子徒弟興業学校と改称、裁縫科を裁縫本科に改め、染裁科・機械染科を増置した。また、同三十二年四月には寄宿舎を設置している。満田ユイが同校本科に在学したのは明治三十二年四月から三十六年四月の四年間であった。[15] 鹿児島市立女子興業学校と改称したのは明治三十六年五月で、このとき教員養成科を併設（三年間で閉鎖）している。なお、同校名は第二次大戦後の学制改革まで続いていく。現在、鹿児島女子高等学校に引継がれている。

最後に、明治期鹿児島の女子教育で主流を占める県立高等女学校[16]に言及しておきたい。同校は、明治三十五年五月六日、鹿児島市加治屋町に誕生した。修業年限四か年、定員四〇〇名という規模であった。初年度の競争率は三倍だったという。後には入学のための予備校までできたといわれている。創立時の学科目は、高等女学校令に基いて制定された「高等女学校ノ学科及其程度ニ関スル規則」に準拠して、修身・国語・英語・歴史・地理・数学・理科・図画・家事・裁縫・音楽・体操等を授けている。同四十三年第二高等女学校創設に伴ない名称を第一高等女学校と改めた。このほか加治木にも同四十五年設立されたので、明治期の高等女学校は県内で三校となっている。

二　女子職業学校の源流

本稿の主題は満田ユイの女子教育観を明確にすることである。そこで、満田の母校・鹿児島女子徒弟興業学校およびそのモデルとなった学校等の史的背景をいくつかの資料に依拠しながら考察してみたい。

女子職業学校の必要性が唱えられるようになったのは明治中期である。まず、当時の資料[17]を掲載してみよう。

共立女子職業学校設立の趣旨

つら〳〵我国婦女の世を渡る有様を視るに、概其父兄良人に便りて、其衣食を仰ぐのみにして、自ら生業を営むことを知れる者甚少し、一朝其杖柱と頼める父兄良人の不幸あるにあへば、忽身を処するたつきを失ひて、俄に貧苦に陥り、徒に人を怨み、世を嘆ちて、せんすべを知らざるに至る者あり、その惨ましさいはん方なし、かゝる有様に至るゆえんを推究むるに、女子の教育いまだ遍からずして、実業を授くるの道行はれざるに由るなり、近頃女子学校の設世に乏しからざれども、其授くる学科は、或は閑雅優美に流れ、或は高尚深遠に趨り、概文字章句の末に拘り、実業に疎くして、日用に適せず、竟に小学以上の学校教育は専中人以上の子弟に行はれて、広く世の女子に及ぼすを得ざるに至れり、吾ら窃に之を憂ひ、同志の者相謀りて、女子の職業学校を設け、専女子に適する諸の職業を授け、併せて、修身、和漢文、英語、習字、算術の如き日用必需の学科を教授せんとするなり、然るに世の人或は職業としいへば、賤しき業として厭ふ者あれども、そは大なる謬なり、今其最見易き例を挙げんに、古より天子后妃の尊きを以て、御みづから農桑の業をとらせられしこと、和漢の歴史に昭々たり、近くは、我か皇太后　皇后の両宮には、毎年宮中に於て養蚕の業を執らせたまふにあらずや、かゝれば、此等の女功は決して賤しき業にあらず、否、之を婦女の本分とこそいはめ、いかでか之を賤むることを得べき、世の女子を持てる人疾く考を茲に運らして、吾らが此挙に同意し、実業の教育を女子に授けしめられんこと吾らが偏に望む所なり、

因に言ふ、凡事業を始むるはたやすき事にあらざれども、始めたる後に永く之を維持せんことは猶難き業なり、故に吾らは深思熟議して、第一着に維持の方法を立て、準備略整ひたり、然るに、校舎の建築は手始に属する業なれども、一時に多額の金を要する者なれば、之を支弁し易からず、依て大方の諸媛諸君子の賛成を乞ひ寄附の金を仰ぎて建築の費にあて、某校を以て共有物とし、諸君と共に永く之を保ち、益隆盛に趣かしめんとす、女子の教育を重んぜらるゝ諸媛諸君子願はくは之を賛成補助せられてよ。

明治十九年四月　　発起人（氏名略）

女子の生活能力と道徳性の向上を意図したこの設立趣意書には発起人二九人が名前を連ねている。全員、東京女子師範学校の関係者であることも興味深い。[18] 以下、その顔ぶれを見てみよう。カッコ内の数字は明治十九年当時の年齢である。

○永井久一郎（34）○那珂通世（34）○中川謙二郎（36）○三田葆光（51）○鮫島晋（年齢不詳）○宮川保全（34）○小西信八（32）○秋山四郎（37）○武村千佐子〔ちさ〕（34）○豊田芙雄子（41）○松本萩江子（35）○上野銀

子（明治十三年七月卒）○丸橋光子（同上）○佐方鎮子（29）○合原琴子〔村上〕（明治十七年二月卒）○植村花亭子（年齢不詳）○鳩山春子〔多賀〕（25）○渡辺辰五郎（42）○松岡登波子（年齢不詳）○安香烈子〔賀古〕（明治十六年二月卒）○三守益子〔福島〕（明治十七年二月卒）○藤村晴子（33）○愛知すみ子（明治十三年七月卒）○奥好義（29）○柴田直記（年齢不詳）○山川二葉子（42）○安達安子（51）○後閑菊野子（20）（明治十七年二月卒）○加藤米子〔田村〕（21）

「共立」とは、共同して学校を起こすという程度の意味である。文中に明記されているごとく、「閑雅優美に流れ、或は高尚深遠に趨り」がちな女学校を批判し、「専女子に適する諸の職業を授け」る職業学校の設立を同志で計画したという。まさに実学主義の再認識である。「文字章句の末に拘り、実業に疎くして、日用に適せず」とは、かつて、明治初期に福沢諭吉らが高唱した実学観に類似している。職業を賤しき業として厭うことなく「婦女の本分」と把え直す、その実例を宮中における農桑の業に求めたところは、いかにも時代相を反映しているが、「女子を持てる人疾く考を茲に運らして」同意し協力してほしい。共立女子職業学校を末永く維持発展させるために浄財を出してほしい、と訴えているわけである。

平均年齢三五・五歳、創立者（五代目校長）とされる宮川保全は嘉永五年（一八五二）の生まれであった。同僚渡辺辰五郎と共に、東京師範学校を退職し、女子の私立学校設立を計画したのは、師範教育変質への不満が原因であり、男子の東京師範との合併による官立女子師範学校の解体が決定的理由であったようだ。[19] 前記二九名一人ひとりの動機を詳述することは本稿の構成上割愛するが、明治十九年は学校制度のみならず、女子教育史上の分水嶺たる位置づけも可能なのである。

明治十九年三月六日、東京の本郷東竹町にある渡辺辰五郎の裁縫塾和洋裁縫伝習所（現東京家政大学）に仮設さ

れた共立女子職業学校は、同年八月神田に移転、現在共立女子大学ほかを擁する一大学園に発展していくわけであるが、発起人の顔ぶれを見ても推察できるように、当代新進の文化人によって支えられていたのである。今、こゝで宮川の言葉を借りると、「普通の女子は小学校を卒えても更に進学する学校がない」。東京女子師範学校、同付属高等女学校、華族女学校、跡見女学校などわずかばかりの学校も「教えるところ女学に傾き、技芸を顧るものがない」「女子に生活能力がないことと、道徳性が低いことを改めてやるのが、今日国家の急務と考え」るという。[20]

遊芸よりも勤労を重視する教育方針は、時代の一般的要求によく適合して、多くの志願者を生み出した。「裁縫塾に裁縫塾が寄遇した」間借り教室では入学者をさばき切れなくなった程である。共立女子職業学校はまさに当時の新学校だったといえよう。生徒の自活生活を目標とし、裁縫・編物・刺繍・造花の四教科を軸とする同校に対し、一般社会はもとより官辺からも共鳴者・協力者が現われ、予想以上の発展を見る。当初の規模は、しかし、小学四年卒業以上を入学資格とし、一年ないし二年の修業年限で適宜卒業させていたと伝えられるから、それほど大きなものではない。裁縫を渡辺辰五郎が、数学を宮川保全が、英語を鳩山春子（旧姓多賀）がそれぞれ教えていた。手芸技工の専門家も勿論教師陣に加わっている。

以上、共立女子職業学校について創設の意図を中心に論考したが、これは、満田ユイの母校である鹿児島女子徒弟興業学校のモデルが同校であることに依る。[21] 両校の影響関係に関する研究は今後の課題に残しておくが、次に述べる渡辺裁縫女学校と共に、女子職業学校の源流をさぐるための重要な素材であるといえよう。

三　渡辺裁縫女学校と満田ユイ

女子教育において裁縫教授のもつ史的意義は大きい。[22] 明治初期、女児の就学が奨励されたにも拘らず、なかなか

軌道に乗らなかったことは前述のとおりである。その解決策として、もし裁縫の教授方法が改良され一斉授業ができるようになればという一般の期待は大きかった。明治十四年四月、東京本郷に私塾を創設した渡辺辰五郎はこの分野における先駆者といえよう。因みに、彼は、安政六年、十六歳の若さで江戸に出、明治元年下総（千葉県長生郡）に帰郷するのだが、江戸では日本橋の裁縫師鳥居清吉の徒弟となって裁縫の技術磨きに専心していた。[23] その技術をもって私塾を開いたところ、町の女子は彼の塾に集まり、小学校に来る者がいなかったという。かくするうちに小学校教員に採用された渡辺は、裁縫教授の体系化を図り、数多くの教科書・研究者を公にしていった。一例として、『裁縫教授用掛図』は郷里の小学校で教えていた頃の創案であり、明治十三年刊行の『普通裁縫教授書』は師範学校用教科書に指定されたのみならず、この書によって渡辺自身が東京女子師範学校に招聘されたのである。

東京赴任後、渡辺は私塾「和洋裁縫伝習所」を設立した。教科目は、和洋裁縫のほか礼法・点茶・生花・造花・刺繍の六つである。彼の名声ゆえに入塾者は少なくなかった。先述のとおり、明治十九年には宮川らに協力して共立女子職業学校を起こし、主席教員となって尽力する。その間、伝習所の授業は休止し、塾にいた生徒の多くは共立に移ったが、明治二十九年、渡辺は共立を辞め専心経営に当たることゝし校名も同年東京裁縫女学校に改めた。修身・教育・家事・習字等の教科目を加え、名実共に学校としての内容を整えたのもこの時期である。のち、東京女子専門学校となり、現在は東京家政大学となったが、愛称「渡辺裁縫女学校」の名は全国にひびいていた。

満田ユイが同校高等科に入学するのは明治三十七年四月である。前年春、鹿児島女子徒弟興業学校を卒業した後、「深く考える暇もなく」皆に奨められて姶良郡加治木の旧家に嫁いでいたが、上級学校に進み女教師になる夢は捨てがたく、ついに協議離婚し上京したのである。その経緯に関する説明は割愛することとして、当時の心境を満田の回顧録から再現してみよう。[24]

私は幼時、人は強固な意志があればある程度までその願望なり目的は貫徹できる、という信念を抱いておりましたので、真に微力な身をも顧みず学に志して、二十歳の春父に懇願し、「良き教師になろう」との希望に燃えて単身笈を負うて上京いたしました。

三ヶ年の修業中に「よき教師になりたい」という先の漠然とした希望が、さらに「学校を建設したい」という欲望に変化してまいったのでございます。……（後略）。

満田遊学中の詳細についてはまだ充分に調べられていないが、上述の説明によって推察できるように、当時の渡辺裁縫女学校は渡辺辰五郎を中心に充実発展の一途を辿っており、この種の女学校としては日本で有数の教育内容を誇っていた。すでに「裁縫や料理が上手で明朗活発」と折り紙をつけられていた満田のことである。よい教師になることを念頭に二年間精励し、優秀な成績で卒業することゝなる。母校の教師に迎えられたことが何よりの証左であろう。しかも、同校の若き経営者渡辺滋は、静岡県に姉妹校を建設し、満田をその経営責任者に任用したいという計画まで立てていたというから、そのまゝ東京に留まっていたとしても、相応の働らきを示したことゝ思われる。精進の二年間は満田の立志修業の時期であった。

四　鹿児島女子技芸学校の発足

「チチキトクスグカエレ」の電報に取るものも取りあえず東京から鹿児島に帰郷した女性、それが満田ユイであった。明治四十年五月のことである。招電が、新設校鹿児島女学館の教師に娘を仕立てようとして親が仕組んだ芝居だったことはよく知られている。満田の回想録を引用してみよう。(25)

ちょうど私が二十三の春、明治四十年五月二十八日のことで、帰宅後三日目から、「今度東京から帰って来た教師」としてその女学校に招聘されました。誰しも一度は経験することでございますが、学窓から覗いた社会と自分が実際に社会の一員となって目撃する現実との懸隔に、いわゆる幻滅の苦杯を味わされました。

それにもまして私の心を寒くしましたのは、神聖視していた学校の無秩序、放任ということでございました。このため、いよいよ日頃の宿願を実現しようと決意し、就任三ヶ月目の同年七月に辞職いたしました。……云々

満田にとって「日頃の宿願」とは、理想の学校を建設することであり、堅実にして役に立つ主婦の養成を主眼とした教育の殿堂を築くことであった。僅か二三歳の身で、この状況判断をなし、自ら難局に立ち向おうとした意志の強さはまさに非凡といわねばならない。

先述のとおり、鹿児島県にも明治二十年代以降、私立女学校設立の試みは続々となされていた。鹿児島女学館の場合も、ある有識者の意志と努力によって創設されたものだろう。それら一つひとつについて設立の経緯やその後の経過を調査してみる必要がありそうである。筆者は、かつて、当時頭角を現わしてきた鶴嶺女学校を研究し小論をまとめたことがある。[26] 鶴嶺に関しては幸わい史料も保存されているので、今後の分析如何によっては、本格的研究が可能と思われる。満田の母校である鹿児島女子徒弟興業学校に関しては、近く九十周年記念を迎える鹿児島女子高等学校に至る綿々とした歴史が刻されている。一方、満田が辞職した鹿児島女学館についてはどうであろうか、おそらくは他の私立女学校と同様、程なく歴史の舞台から消えていったのではあるまいか。明治中期・末期に焦点を合わせた総合的研究が待たれている。

鹿児島市平之町の通称「新納殿（にいろどん）の筋（すじ）」に「女子技芸講習所」が開設されたのは明治四十年八月三日であった。二

階建ての民家を改造した塾舎に招聘された教師の顔ぶれは、林タメ子（礼法）、鮫島章子（和洋割烹）、管沼ハル子（果実細工）らである。鮫島は東京割烹女学校出身、管沼は渡辺女学校出身と記されている[27]から、満田が東京から招いたのであろう。生徒募集に先立って、鮫島を会長とする講習会（八月十五日から二週間）を企画したところ一八〇名が参加したという。八月十五日付『鹿児島実業新聞』はつぎのように報じている。[28]

女子手芸講習会科目　当市平ノ町百九十五番戸に於て開会の同会は本日より開始する由なるが、其後会員の希望に依り作法・割烹・果実細工の外、和洋裁縫・茶の湯等を加へ、割烹実習室の如き大に改良を加へ、短期なる講習会としては完全なる設備をなせりといふ。

満田の概念では「技芸」を講習することがねらいだった筈だが、新聞記事には「手芸」の伝習という紹介になっている。校名にしても「高等女子手芸伝習所」と記している新聞記事に注目したい。いずれにしても、この種の技芸に対する一般の関心が予想以上に高いことを知った満田としては、早いうちに、技芸講習所を学校組織に改めたく、同年暮には「鹿児島女子技芸学校」の設立方を県に申請している。この申請に関しては満田の母校女子興業の黒川澄江校長が尽力している。

話を前に戻して、講習会後の動きにふれると、明治四十年九月八日付け『鹿児島新聞』の記事[29]が注目に値する。

科目および修業年限　当方平ノ町百九十五番戸（新納殿小路ノ横小路）の鹿児島女子手芸伝習所にては、今回生徒を募集し、来る十六日より開校する由なれば、志願者は十四日までに出願すべし。科目修業年限は左の

如し。○高等裁縫科　六ヶ月　○和洋割烹科（普通科　三ヵ月・研究科　二ヵ月）　○編物科（速成　三ヵ月・普通　六ヵ月）　○活花科　一ヵ年　○茶道科（礼法）　二ヵ月　○造花科　二ヵ月　○果実細工科　二ヵ月　○ツマミ（細工）科　三ヵ月　（○袋物　二ヵ月）　尚ほ同所にては言語動作を慎み、苟も女子の美徳を毀損するものは入会を許さずといふ。教師は伊藤フデ・林タメ・矢野ノブ・有馬サエ・鮫島フミ・満田ユイ・菅沼ハル子の七人なり。

『鹿児島実業新聞』でも同日付けで同様の記事を載せている。前記かっこで示した内容はこれに基いている。同所では、これらの科目について「一科若しくは数科を兼修するを得」[30]としていた。

入所希望者は五十余名に達し、開所式には四五名が出席しているが、入所資格を高等小学二年修業以上に限定したため、折角の希望を果せない人たちも出てきた。「科目の依りては規程の学力を有せず、また年齢の如何に関せず入所差し支へなく随時入所を許すべし…」[31]（明治四十年九月十八日付け『鹿児島実業新聞』）という便法を用いることになったのもむべなるかなである。入所生で最も多かった科目が割烹で、裁縫、作法等がこれに次いでいたというが、その内容を例示すれば「裁縫は部分縫・単服・袷服・綿入の類は言ふ迄もなく被布道行・シャツ・男子袴其の他数十種類を教授し、料理は信濃むし豚のソホロあい・鴨南蛮煮ほか数十種の日本料理を始め七十余種の西洋料理を伝習する筈なり」[32]（明治四十年九月二十七日付け『鹿児島新聞』）といったものらしい。

授業内容についての具体的資料に乏しいのでこれ以上の記述は難しいが、東京仕込みの技芸を通して鹿児島県の女子教育に新風を吹きこもうとする満田の並々ならぬ配慮が窺える。

常設の家事講習会に端を発した満田の教育道場は、関係者の努力によりまもなく学校組織に移行させることがで

きた。翌明治四十一年二月二十二日付けの新聞広告[33]は次のとおりである。

生徒募集広告　高等女子手芸伝習所儀今般私立鹿児島女子技芸学校ト改称シ本科生六十名専修科生四十名ヲ募集シ来四月ヨリ始業スヘキニ付志望者ハ来三月末日迄ニ願書差出サルヘシ　私立鹿児島女子技芸学校

同校は満田八束を設立者として認可された。これは満田ユイが二三歳の独身女性であったための措置であった。実際はユイが運営したわけだが、校長職も初代が園田直蔵、二代園田英吉、三代石原周鑑と続いていく。

「人の母たり妻たるものの為には至って便利なるべし」[34]（明治四十年九月十八日付け『鹿児島実業新聞』）と報じた山内貢の回想録は、草創期の一端を後世に伝えている。[35]

当時私は平之町の新納殿の筋のすぐ近くに住み、鹿児島実業新聞の教育面の責任者でもあったので、満田先生のご苦労をよく知っていた。官僚主義の強かった当時の鹿児島で私立の学校を造るということは、たいへんな抵抗があったが、私は鹿児島の教育で一番必要なのは女子教育だと信じていたのでできるだけの協力をした。生徒募集には終始苦労をされたが、私立には特待の制度を許さなかった時代に、先生は優秀な生徒には月謝免除を認められ、優秀な子女のいる家庭をわざわざ訪問して歩かれたこともある。民家を利用した校舎は、全生徒三十人が座るといっぱいになった。門を入ると南天の木が植えてあって、割烹教室には満田先生が生けた花がいつも飾ってあった。先生はまた英語教育の必要性にいち早く気づかれ、英語を教えなくては、とよく云っておられた。しかしちゃんとした英語教師もいなかったので、私がたのまれて教えることになった。二階には満田先生の個室があったが、いつも生徒といっしょに過ごされた。生徒が帰ったあと、三十畳くらいの教室を

一人で掃除をされた。生徒の間違った点は大声で注意された。女子教育の情熱に燃えた信念の人でした。

渡辺裁縫女学校で学んだ識見と技術をもって郷里鹿児島に理想の学校を建設したいという満田の意気込みが伝わってくる文章である。

二月二十二日付け『鹿児島新聞』には次の記事が掲載されている。(36)

（前略）来四月一日より新学期の授業を開始すべく今回本科生専修科生を募集する由なるが、本科は尋常卒業程度、専修科は高等卒業程度にして、其学科は

本　科　修身・国語・算術・図画・家事・教育・裁縫・編物・造花・活花・礼法・割烹等

専修科　修身・家事・割烹・裁縫・編物・活花・礼法等

修業年限は本科二ヶ年、専修科一ヶ年にして、各科の担任者は東京渡辺裁縫女学校出身の満田ゆい外四名にて、尚割烹は専門の知識ある教員之を担当し、夫々懇切に教授する由なれば、入学希望者は四月末日迄に願書差し出すべし。

満田の肩書きを「東京渡辺裁縫女学校出身」としている点にも留意しておきたい。繰返すまでもなく、鹿児島女子技芸学校のモデルは満田の出身校・渡辺裁縫女学校であり。教育理念の中に女子職業学校の趣旨が受継がれているのである。

技芸学校の学科構成は明治四十二年一月二十九日の校則改正で、本科・専修科のほかに研究科（六か月）が増設された。生徒数増加のために校地も新築移転している。

こゝで初期の頃の卒業生をみておくと、第一回（明治四十一年度卒業）生は園田ヤエ・永井富美・神田橋ヤス・藤田サワ・長野ツヤ・宮里竹の六人、いずれも専修科であり、第二回生は研究科の川久保ウメら六人と専修科の児島イネら四五人であった。本科生が初めて卒業したのは第三回生の八人（原口ミネ・橋口ヒデ・重信フタミ・遠矢コト・高橋エル・野口コウ・伊地知ヨネ・浜園フデ）であった。

その後の動静については史料不足[37]のために正確を期し難いので省略する。おそらく、その原因は戦火による書類焼失によるものと推察されるが、今後、何らかの方法で補充し、鹿児島女子技芸学校創設期の実態を明確にしたいものである。因みに、卒業者数が百名を越すのは大正十年度であり、その翌年、満田ユイは第六代校長に就任、施設を拡充し、組織や学則を改正している。この間の推移については稿を改めて論考したい。

五　事例研究・鶴嶺女学校の入学者

鹿児島県における女子教育の源流を明らかにするための事例研究として、次に紹介するのは鶴嶺女学校に関する史料分析である。

鶴嶺女学校は鹿児島県における「最初の本格的な私立女学校[38]」と評されている。先述のとおり、明治二十～三十年代には十余校の私立女学校が簇生しているが、その中で全国的に名声を博したのがこの鶴嶺であった。鶴嶺の場合も、野守峰子の裁縫塾を母胎にしていることから明らかなように、技芸的教科を中心とする学校で、この点では渡辺や共立等とも共通する教育内容を備えていた。事実、鶴嶺女学校の教科目を見ると、家事・裁縫・編物・刺繍・割烹・園芸等が、国語・算術・理科等と並んで設けられており、技芸科なる名称も時代の動向を察知していた。

鶴嶺女学校の教育綱領「我国建国ノ精神ニ基キ薩摩古来ノ美風ヲ尊重シテ内剛外柔ノ婦徳ヲ養ヒ以テ現代ニ処セ

表1　鶴嶺女学校入学者月別統計

入学年月	番号のついた者		番号なし	計 (人)		
	判定	推定				
明治29年7月	1	(1)	2	1	18	30
8月	5			7		
9月	10			10		
10月	0		1	0	12	
11月	3	(1)	1	4		
12月	7			8		
明治30年1月	8			8	14	56
2月	2			2		
3月	4		1	4		
4月	10		1	11	42	
5月	10	(1)	1	11		
6月	19		2	20		
7月	21			23	65	77
8月	6			6		
9月	36			36		
10月	4	(1)		4	12	
11月	7			7		
12月	1			1		
入学時不明		4	1	5		
合計	154	4	10	168		

シム」が制定されたのは明治四十二年三月であるから、満田の新学校とはやがて競合関係に入るべき時代といえよう。鹿児島県でもすでに公立の高等女学校が軌道にのっていたわけであるから、その一方では、私立学校同志の連帯も亦大方の期待するところだったと思われる。

しかし、本稿で鶴嶺をとりあげたのは他に理由がある。それは、鹿児島玉龍高等学校に保管されていた「鶴嶺女学校学籍簿」（一種の入学登録記録）を調べてみると、明治中期の状況が如実に把握できるからである。史料は尨大な量にのぼるため、筆者としては、まず初年度、すなわち明治二十九～三十年入学の一六八名に限って、いくつかの角度から分析してみることにした。

鶴嶺女学校の学籍簿綴りにしたがって考察した場合、明治二十九年七月以降翌年に

かけて入学した生徒一六八名が第一期生といえそうである。開学早々これだけの生徒を集めることができたのは一驚に値するが、丹念に調べてみると、入学時期は一定していないことに気づかせられる。表1は同校の「入学者月別統計」であるが、まさに随時入学の様相を呈していたことがわかる。原簿には登録順に通し番号が付してあるが、十名程、番号のない学籍カードが挿入されている。この生徒たちは登録だけ済ませて実際には出席しなかったのであろう。なぜなら入学年月日は記載されているが卒業・退学等の欄が空白になっているからである。一方、入学年

表2　鶴嶺女学校入学者における入学後の状況
(明29.7～30.12)

進路状況等		人数	
卒業	本科	43	93
	裁縫学科	50	
退学	退学	26 (1)	41
	退校	15	
除名，除籍		3	
病死		1	
不明		30 (9)	
合計 (人)			168

表3　鶴嶺女学校入学者の年齢別統計
(明治29年7月～30年12月迄に入学した168名のうち，生年月日がわかっている者82名)

生年	年齢	人数
明治3年	27歳	1
明治5年	25歳	1
明治8年	22歳	3
明治9年	21歳	1
明治10年	20歳	4
明治11年	19歳	1
明治12年	18歳	6
明治13年	17歳	13
明治14年	16歳	28
明治15年	15歳	17
明治16年	14歳	4
明治17年	13歳	1
明治18年	12歳	3
合計		82人

月日が記載もれになった者も四名いる。カード所在前後の通し番号を見て入学時期を推定することはできるが、統計上は別わくで出してみた。表2は入学後の状況を示した統計であるが、卒業できた者五五%、退学・退校・除籍等が約四分の一いるほか、消息不明者が三〇名を越している。

学籍簿には生徒の出身地や生年月日等を記載する欄が設けてある。(空白のまゝにしてあるカードが多い)。表3は、入学者のうち年齢がわかる者八二名を対象にした統計である。

試みに、明治三十年五月入学者を事例としてその記載事項を転記してみよう。

登録番号㊸　宮里みね　薩摩郡永野村出身　五月三日入学、明治三十年十一月十日退校
㊹　大田ため　鹿児島市下荒田　五月六日入学　三十一年四月本科卒業、明治十三年六月十六日生
㊺　永島けい　鹿児島市加治屋町　五月十二日入学　三十一年四月三十日本科卒業　明治十四年一月生
㊻　津曲さと　鹿児島市泉町　五月十三日入学　三十一年三月三十日退学　明治十五年十一月生
㊼　鵜木たね　姶良郡　五月十八日入学　三十一年四月三十日本科卒業　明治十四年十二月一日生
※　平地みさ　串木野　五月二十六日入学　明治三年十二月生
㊽　三木ます　薩摩郡入来町　五月二十九日入学　三十三年四月本科卒業　明治十八年二月生
㊾　永井みさ　伊佐郡菱刈町川北　五月十八日入学　三十年六月退学　明治十五年十二月二十九日生
㊿　川崎よし　鹿児島市柳町　五月入学　三十年十月退校
(65)　須賀しま　伊佐郡菱刈町川北　五月二十八日入学　三十一年九月病死　明治十四年十一月一日生
(77)　安田あい　鹿児島市泉町　五月三日入学　三十一年退校　明治十四年十月生

以上十一名の動静が示すように、年齢を異にした生徒が県内各地から随時入学し、種々なコースをたどっていっ

たことがわかる。

学籍簿は、一部紛失した年度もあるが、全期間に亘って保管されている。時代と共に記載形式に改良が加えられ、成績等も記入されるようになった。その後の史料分析はかなりの日数を要するので本稿では割愛する。

むすび

本研究は、鹿児島県中等教育史研究の一環をなすものである。これまでの研究の中で、筆者は、鹿児島県内の高等学校関係沿革資料の総合目録を作成し、[39] 研究史料の所在を確かめながら、収集作業を繰返してきた。その間、女学校を前身とする高等学校（さらに大学）には留意し、特に草創期の資料発掘に力を尽してきた。鶴嶺女学校関係の原資料は史料調査の過程で発見したものである。

さて、女子教育の源流を明らかにするためには、事例研究を基本としながらも、その方法論を明確にしてゆくことが肝要である。全国の動向を近代教育の史実に即して理解し、鹿児島県における特質は何であるかを考察することも忘れてはならない。筆者はそこで、現在南九州唯一の四年制女子大学に発展している鹿児島女子大学の沿革について、その前身でもある鹿児島女子技芸学校の教育理念や内容が、全国的にみてどのような流れの中に位置づいているのか、すなわち、具体的には、創設者満田ユイの思想形成に連なる母校・鹿児島女子徒弟興業学校や「東京渡辺裁縫女学校」さらに両校と深いかゝわりをもつ共立女子職業学校の成立経緯等を概観することによってそれを明らかにできるのではないか、という問題設定をしてみたのである。すでに指摘したことではあるが、共立女子職業学校が東京女子師範学校の解体を危惧する有識者の間から興ってきた歴史的事情に、筆者は強い関心を覚えるものである。師範教育面ではそれほどの遅れをとっていないと目される鹿児島県の場合も、明治二十年代は同様の問

題が潜伏していたと考えられる。良妻賢母主義を根幹とする高等女学校の制度確立期というべき明治四十年代は、前記問題発生の第二波が押し寄せた時期と解釈することができる。鹿児島女子技芸学校の誕生は、その後現在に至る女子教育史の動きの中で全国的にもかなり重要な意義を有していると思う。

さらに敷衍すれば、仙台には朴沢三代治の松操女学校があり、その影響を受けて、熊本には内藤儀十郎の尚絅女学校があるように、全国各地には同じ基盤に立った女学校が存在していたことを意識して、鹿児島県の女子教育を見直すことである。一般民衆の要望がその根底に息づいていたのではあるまいか。女子教育特有の問題点を明らかにするために、地域の文化的土壌に注目せねばならない。

本稿はまだ試論の城を脱しえていないが、新しい女性像を確立し、男女平等の価値観にもとづいた社会を形成するための理論形成にいさゝかでも寄与できれば幸わいだと考えている。(40)

注

(1) 満田ユイ（一八八四～一九三二）に関する研究書は少ない。筆者が典拠とした文献は、日高旺執筆『満田ゆい小伝』（昭和四十二年十一月・実践学園刊）、『実践学園七十年史』（昭和五十二年十一月・実践学園刊）、南日本新聞社編『郷土人系』中巻（昭和四十四年九月刊）、日高旺『女たちの薩摩』（昭和五十五年十月・春苑堂書店刊）等である。尚、実践学園では毎年創設者年忌祭を行っているが、鹿児島女子大学では当日記念講話がある。本稿は昭和五十九年六月七日の筆者講話草稿にもとづいていることを付記しておく。

(2) 梅根悟監修『世界教育史大系　三十四　女子教育史』（昭和五十二年六月・講談社刊）二一八ページ以下を参照。

(3) 鹿児島県教育委員会編『鹿児島県教育史』下巻（昭和三十六年六月　鹿児島県立教育研究所刊）一八ページに依る。〈以下同書については『県教育史』と略称〉

(4) 『県教育史』二四ページ。

(5) 『鹿児島大学十年史』（昭和三十五年八月刊）二一三ページ〈以下『鹿大十年史』と略称〉　なお、校名については『県教育史』

とのくい違いが見られる。後日検討を要する問題といえよう。

(6) 『鹿大十年史』二一三ページより引用。

(7) 『文部省第十二年報』（明治十七年度）七一一ページ。

(8) 土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』を参照。

(9) 『県教育史』一七六ページより再引。

(10) 『文部省第六年報』（明治十一年度）四〇九ページ。

(11) 同『第八年報』（明治十三年度）五二〇ページ。

(12) 『県教育史』一七六～一七八ページ。

(13) 拙稿「鶴嶺女学校について」（鹿児島女子大学『研究紀要』第五巻　第一号　昭和五十九年二月　一五九～一八五ページ所収）ほかを参照。

(14) 鹿児島女子高等学校要覧所載「学校の沿革」にもとづいている。

(15) 前掲『満田ゆい小伝』　四二ページを参照。

(16) 拙稿「鹿児島県中等教育史研究序論――女子教育を中心として――」（『地方教育史研究』第四号　三～一八ページ所収）を参照。

(17) 共立女子大学百年史編集室所蔵。原本はA4判一枚。字体は当用漢字に改め、句読点を加えた。

(18) 岩田朝一・古谷博「共立女子職業学校の成立過程（二）創設に参加した人々」（『共立女子短期大学　家政科　紀要』第二十七号　昭和五十九年二月　一四一～一六〇ページ所収）を参照。

(19) 同書　一五六ページ。

(20) 平塚益徳編著『人物を中心とした女子教育史』〈以下『人物女子教育史』と略称〉（昭和四十年六月・帝国地方行政学会刊）一〇四ページ以下。

(21) 前掲『実践学園七十年史』　四三ページを参照。

(22) 関口富左二「江戸時代における裁縫の教育的意義――裁縫教育における綜合能力育成の検討――」（『郡山女子大学紀要』第八集　昭和四十六年十二月、一七八～二〇〇ページ所収）を参照。

(23) 『人物女子教育史』一〇一ページ。

(24) 『実践女学校開校二十五周年記念号』（昭和七年）――『実践学園七十年史』四六ページより再引。

(25) 同書　四七ページより再引。

(26) 前掲拙稿「鶴嶺女学校について」（鹿児島女子大学『研究紀要』第五巻　第一号所収）を参照。

(27) 『鹿児島新聞』明治四十年八月七日付け（『実践学園七十年史』五一ページより再引。）

(28) 同書　五二ページ。

(29) 同書　五五ページ。
(30) 同書　五六ページ。
(31)(32)同書　五七ページ。
(33) 同書　五三ページ。
(34) 同書　五七ページ。
(35) 『実践女子高等学校新聞』六十周年記念号
(36) 『実践学園七十年史』　六〇～六一ページより再引。
(37) 同書　六一ページ以下を参照。
(38) 前掲『県教育史』　一七七ページ。
(39) 拙稿『鹿児島県高等学校沿革資料目録稿』　一九八三年九月十七日現在。
(40) 片山清一「男女共学問題からみた近代日本の女子教育の歩み　(一)明治初期から昭和前期まで」(目白学園女子教育研究所々報『女子教育』第二号　一九七九年五月　一～一一ページ所収) を参照。

〈付記〉　本研究は、実践学園による認定研究「高等学校に関する史的研究――鹿児島県を中心として」(昭和五十六・五十七年度個人研究) の成果をふまえ、さらに、昭和五十九年度文部省科学研究費補助金による個人研究「後期中等教育に関する史的研究――鹿児島県を中心として」と、鹿児島県育英財団による研究助成、テーマ「鹿児島県における後期中等教育に関する史的考察――女学校を中心として」(昭和五十九年度個人研究) の一環をなすものである。なお、脱稿後、筆者は共立女子学園と渡辺学園を訪問し、史料調査収集を実施してきた。その結果については後日まとめる予定である。

(受付　一九八四・一〇・一六)